

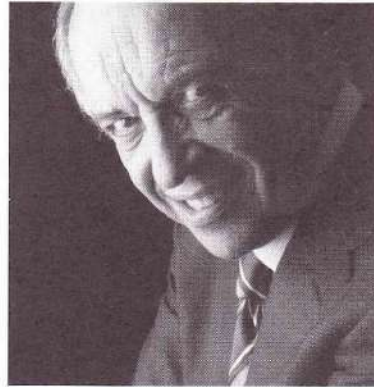
# ゼッフィレリ時代を共に生きた人々(前)

文＝中東生  
Text＝Shinobu Naka

## レオ・ヌッチ(オペラ歌手)

フランコ・ゼッフィレリの時代が終わった。「新解釈を加えないと、ニュープロダクションを創る意味はない」という風潮の現代に金字塔を刻むようなゼッフィレリの遺作《椿姫》が、6月21日、アレーナ・デイ・ヴェローナ音楽祭の開幕演目として上演された。

「私たちと一緒にここに  
いる気がするよね、と息子の  
ピッポ(養子の一人)と  
話していたんだ」と語るの  
は、ジェルモンを歌ったレ  
オ・ヌッチだ。初日翌日、  
前夜の興奮とゼッフィレ



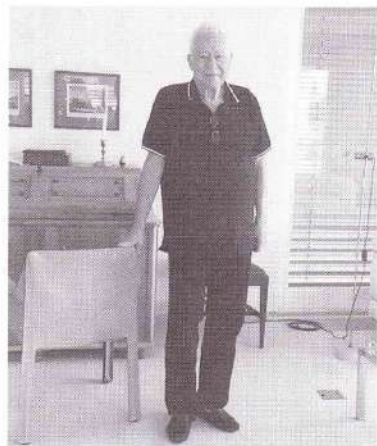
ゼッフィレリの「遺作」となった《椿姫》  
に出演したヌッチ

リのない空虚感が混ざった複雑な心境を話してくれた。「彼は生涯で6〜7つの《椿姫》を創り上げたけれど、今回のものが彼にとって究極の形なので、それに参加できたのは幸運だった。彼は稽古には来られなかったけれど、コレオグラファーがすべて彼の指示通りに稽古を付けてくれたんだ。ゼッフィレリは何カ月前から話すこともできない状態だった。最後に会ったのはもうずいぶん前だけど、クリスマスのお祝いのために連絡をくれることは欠かさなかったね。ゼッフィレリとは、妻がスカラ座の《仮



サンティはレジーテアター嫌いで知られ、演出は常に正統的なものを求める、いまや数少ない巨匠だ。ゼッフィレリはマエストロが敬愛する演出家の一人だった

面舞踏会》でオスカを歌った時からの知り合いで、私自身もメトロポリタン劇場でのレオンカヴァッロ《道化師》やヴェルディ《ドン・カルロ》、スカラ座のブッチーニ《ボエーム》で一緒に仕事したけれど、彼との仕事はいつも大きな喜びをもたらしてくれるんだ。彼はイタリ



演出家のハンベはゼッフィレリに感銘を受けたという

出次第では指揮台を降りるが、芸術家としてのゼッフィレリに敬意を抱いているという。「彼の演出を初めて観たのはスカラ座でのヴェルディ《仮面舞踏会》だった。メトロポリタン歌劇場でヴェルディ《アイダ》を指揮した時、拍手をする彼を見たのが初めての出会いと言え  
るかな。私は彼の演出したオペラを多数振ったけれど、初日公演はいつもジェイムズ・レヴァイン(当時の音楽監督)が振るので、一緒に稽古する機会には恵ま

アの偉大な演出家の系統を継ぐ最後の人間だろうね。現代の曲がった解釈ではなく、劇場のあるべき姿を実現してくれるのだから」

## ネットロ・サンティ(指揮者)

ゼッフィレリの演出は歌手だけでなく、指揮者も幸せにするようだ。1987年に「ようやく音楽と演出が同じ比重のオペラ公演に出会えた」と、ニューヨークのメデアが絶賛したブッチーニ《トゥーランドット》をメトロポリタン歌劇場で振ったネットロ・サンティは、演

れず、直接話したのはたった1回、10分ほどだった。でも、彼の演出でオペラを指揮すると、いつも満足感を与えてもらえるんだ」

## ミヒヤエル・ハンベ(演出家)

ゼッフィレリはどのような演出家だったのだろうか。同じように、読み替えた演出に逃げず、作品の奥深くまで斬り込み、美しく効果的に演出する大家ミヒヤエル・ハンベは、ゼッフィレリの演出をこう解く。  
「残念ながら直接会うことは叶いません

入できる機会が多量に仕込まれているのです。例えば彼の映画版《椿姫》の中で、若い作業員が、独り死にゆくヴィオレッタの家から家具を運び出す場面があります。彼らの目が一瞬合った時、彼女の艶っぽい魅力が今一度ぱっと燃え上がるのです。

こんな場面を創造できるのは偉大な演出家だけでしょう。ゼッフィレリにとつての様式は、その時に手掛けている作品が求めている単なる「結果」なので、前述のようなレットテルで括られるのを拒むでしょう。他の偉大な演出家と同じように、彼も、映画、演劇、オペラ、テレビ等、さまざまな形で表現してきましたが、彼が一貫して情熱を注ぎ追求したのは、「人物描写」なのです。  
ヴィオレッタの葬列シーンから始まるこの《椿姫》は、遺言のように彼らの胸に刻まれたようだ。(次号に続く)